

まつりを支えるひと、まつりが支える人生

「明治天皇百年祭」に招待され、舞台上で田植え踊りを披露する請戸の子供たち→



福島第一原発から僅か6キロ、浪江町請戸地区の荻野(くさの)神社に三百年伝わる『安波(あなば)祭』。小学生の女の子が早乙女となって踊る田植え踊りが、震災の年の夏に早くも甦りました。長年、地元で田植え踊りの指導にあたってきた佐々木繁子さんの避難先に、離れ離れになり寂しい思いをしていた子供たちが集まり、踊りの練習が再開されました。

「請戸の田植え踊り」は全国各地に招待され、3年間になんと24回もの公演を行いました。一旦は断ち切られた地域の関係が、田植え踊りによってつなぎとめられたのです。



懸田弘訓さん

長年にわたり福島県の民俗芸能の研究を続けてきた懸田弘訓(かけたひろのり)さんは、県立博物館などに勤めるかわら、自前でそろえた映像機器で半世紀以上も福島の祭を記録してきました。3年前福島第一原発の事故が起きると懸田さんはすぐに調査団を結成し、祭を受け継いできた人たちの避難先を「百か所以上も訪ね、福島の民俗芸能が置かれた危機的な状況※を明らかにしました。

※福島県内にあった800もの民俗芸能のうち、33が再開されたが、もとの場所で再開できたものは11しかない

念願だった田植え踊りの復活、しかし佐々木さんは不安を抱えていました。避難生活が長引くにつれ、子供たちは成長し、踊り手である「請戸の小学生の女の子」は減少する一方で、それに加えて、震災後各地で公演を続けた踊りが、次第にイベント化し本来の神聖さが損なわれつつあると感じるようになってきたのです。佐々木さんは、福島で民俗芸能の調査を続けてきた懸田さんのもとに相談に訪れました。

そして、「まつり」をとおして支えあう人と人

佐々木さんの不安を聞いた懸田さんは、これまでも請戸の田植え踊りが社会の変化の中で姿を変えてきた経緯を話しました。1968年に懸田さんが撮影した安波祭の写真をみると、当時の踊り手は小学生ではなく、なんと年頃の女性とおしりを塗った男性が入り乱れて踊っています。かつて田植え踊りは男と女の社交の場だったのです。しかしこの写真が撮られた直後、福島第一原発の運転開始により、人々は豊かさを求め、田植え踊りが始まる農閑期になっても忙しく働くようになり、踊り手不足に頭を悩ませた請戸の人たちは、80年代の初めに地元の小学生に踊りを教えたのです。地域の実情に祭の形を合わせる事で伝統を守ってきた歴史を知り、佐々木さんの不安のひとつは解決の方向を見いだしました。



↑大人の男性が田植え踊りを踊っている写真(『福島教育情報データベース』より)

形を変えながら生きてゆく

平成26年2月、請戸の人が数多く暮らす福島市内の仮設住宅で安波祭が開かれることになり、全国から踊り手が集まりました。踊り手には26歳の女性も加わりました。佐々木さんが田植え踊りの経験者と呼んだのです。さらに史上最年少、避難先で生まれた2歳の踊り子も参加する事になり、ここに田植え踊りの新しい伝統が始まりました。祭にさきがけて、仮設住宅に祭壇を設け、荻野神社の神様をお呼びするための祈りが捧げられました。もとの荻野神社は礎石以外全て流失、宮司と子息の禰宜(ねぎ)の両夫妻も犠牲になっています。今回は懸田さんの働きかけに福島県神社庁が全面的に賛同し、神様をお招きする手順の一切を取り仕切ってくれました。イベントではなく、地元の神様に奉納するという田植え踊り本来の意味を取り戻す事ができ、佐々木さんのもうひとつの不安もこれで払拭されました。原発事故後、バラバラになる事を余儀なくされた請戸の人々ですが、この時だけは誰もが「ふるさと」に帰る事ができました。請戸から遠く離れた土地で、請戸を知らない世代に伝えていく祭。かつて歩んだ事のない道を一歩、前に進み始めました。地域の9割近い祭や民俗芸能が突然、存続の危機に陥る…。この未曾有の事態に際し、その中でどうやって自分たちの伝統を次の世代に受け継いでゆくべきか。人々は今、答えを求めて懸命に手探りを続けています。



↑荻野神社の神様の前で、晴れやかに奉納の舞いをおさめる

we support!
RQ
災害教育センター

MONTHLY

「東北に黒龍を送ろう! 大作戦しんぶん」改め
復興支援『すけ(さ)きた』
「すけ(さ)きた」
しんぶん

「すけ(さ)きた」とは宮城県登米市あたりの言葉で「ボランティアに来たよ」という意味である

JULY
11
2014

